



215号

2016 / 7 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



ミュージカル『カナス聖典』(注)を踊る 2015年7月 中国新疆布尔津劇場
馮学敏 (フオンシェミン)
(注) 歌と踊りでできている大型民族舞踊劇。春、夏、秋、冬と全4章に分けて、新疆ウイグル自治区アルタイ地域に伝わる伝説や伝統文化を歌や踊りで表現する。
(中国写真家協会会員・日本写真家協会会員・世界華人写真家連盟副会長)

先月本屋さんの話で、大きな間違いを犯しました。「延安の町で本屋さんを探したが、本屋はないと言われた」というくだり、前号で「延安」と書いたのは、延安から更に300キロ近く東北東へ行った「延川」の間違いでした。あの旅では、北京から延安行きの汽車が雨で、西安止まりになってしまい、長距離バスでやっと延安に到着し、5時間遅れで落ち合った友人に、すぐに車に乗せられて4時間近く走って、やっとのことで辿り着いた街が延川だったので、辿り着くまでに苦労した延安が印象深く、つい書き間違えてしまいました。

延安市は、長征の終着点で中国革命の聖地と言われる大きな街、新華書店が生まれた土地です。新華書店の前身は、当地の光華書店で、1942年に改名し、共産党の機関誌等の販売を手掛けるようになった国営企業です。1948年には、毛沢東が毛筆で「新华书店」の文字をロゴとして書き与え、これが現在まで新華書店に掲げられて、目印となっています。私たちは延安の市内観光が出来なかったのが、確認はしていないのですが、市内には新華書店の大規模店がある筈です。

もう一つ前号の話に追加すると、大型書店として紹介した、王府井書店も北京図書大厦も、共に新華書店の系列です。新華書店のサイトには、上記2店の他に、北京の大型店として、中関村(中関村)図書大厦と亚运会村(オリンピック村)図書大厦がリストアップされています。オリンピック村の書店には行ったことはありませんけれど、中関村図書大厦には何度か行きました。ビルの中に、小さな本屋さんが軒を連ねているような雰囲気、新華書店の経営とは全く知りませんでした。家主さんが新華書店と言うことでしょうか、雰囲気に落ち着きがなくて、私は好きではありません。

前回の訂正と補足説明で随分スペースをとってしまいましたが、今月は中国の本の価格について、考えてみたいと思います。私が初めて北京で生活した2000年頃、中国の本は、装丁が雑で、紙もあ

まり良くないので、使用頻度の高い本は、すぐページがバラバラになってしまいました。それでも価格は、殆ど一桁台の元で、高くても15元程でした。

当時の換算レートは、換金手数料を考慮しても、1元=12円と思えば間違いないと言われていたから、20元以下で必要な本が買えるのは魅力でした。しかし、この本の値段、北京の市民生活から見ると随分高いものだったのです。

初めて北京で買い物をした時は、何と言っても物価が安いのに感激しました。当時は、まだスーパーなどは無くて、毎日の食料品は近くの店に買いに行くのですが、品物についている値段が、0.2元とか0.3元とかで、単純に日本円に直しても随分安いと思いますが、それが皆、1斤(500g)当たりの値段なのです。野菜など、山と積まれた中から、良さそうなものを必要なだけ箆に入れて計ってもらい支払うのです。大抵は500g以下ですから、間違いではないかと思うほど安く、なんだか自分がリッチになったような気がして、随分嬉しかったものでした。

お肉屋さんでも、天井からぶら下がっている、姿のままの牛や豚の足や胴から、好みの部位を好みの量だけ切り取って貰って買っても、5元にもなりません。食料品店で10元の買い物をするのは多すぎて大変な時代に、本1冊が10元位と言うのは、庶民の生活の中では随分高価なものでした。

しかし、北京では今、物価は上がり、生活様式も変化して、値段が小売店より高いスーパーマーケットで買い物をする人が増えて、毎回の支払いも100元を超えることが多くなりました。ところが、中国の本の値段は、昔より高くなったとは言え、100元まで値上がりしていません。と言うことは、中国の本は、北京の人々には、昔より買い易くなったということでしょうか。でもスーパーでの買い物は、まだ一般的ではありませんから、対比の例としては不適切ですね。単純に、本の価格は、生活必需品の値上がりと比べれば、値上がり幅が少ないようです。

Jūn zǐ yì shì ér nán yuè yě
君子易事而难说也くんし つか やす よろこ がつ
君子は事え易くして説ばしめ難し 〈子路第十三〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

君子とは人の上に立つ人、指導者のことをいいますが、それに加えてもう一つ、それにふさわしい人格と能力を備えた人、という意味があります。『論語』には孔子の言葉として、次のような一節が見えます。「君子易事，而难说也。说之，不以道，不说也（Jūn zǐ yì shì, ér nán yuè yě。Yuè zhī, bù yǐ dào, bú yuè yě）」（君子は事え易くして、説ばしめ難し。之を説ばしむるに、道を以てせざれば、説ばざるなり）〈子路第十三〉。君子の下では、仕事はしやすいが、喜んでもらうのは難しい。道理にかなったやり方をしなければ喜んでくれないからです。この場合の君子とは、後者の意味、人の上に立つにふさわしい人格と能力を備えた人のことです。そういう上司の下では恐らく働きやすいことでしょう。しかし一方、道理にかなったやり方で、まともな仕事をしない限り、なかなか喜んでくれない。その場限りのキレイごとやごまかしは通用しない、ましてや不正行為などもってのほかということです。なお、この場合の「説」は「悦」の異体字で、「よろこぶ」という意味です。

さらに次のように続きます。「及其使人也，器之（Jí qí shǐ rén yě, qì zhī）」（其の人を使うに及んでは、之を器にす）。人を使うときには、その適性を考えて使う。「器」とは、用途の定まった器物のことで、これを人に例えれば、適材適所に人材を配置するということです。「器」には、得意分野、専門職、スペシャリティーという意味あいも込められています。働きやすさのカギはここに 있습니다。

一方、君子の反対語は小人です。小人の本来の

意味は人の下で働く人のことですが、仮に地位の高い人であっても、それにふさわしい人格、能力を持たない人のことを小人しょうじんといいます。それとは逆に、役職に就かない人であっても、人格、能力に優れた人は、立派な君子と言えます。

孔子はまた次のようにも言っています。「小人难事，而易说也。说之，虽不以道，说也（Xiǎo rén nán shì, ér yì yuè yě。Yuè zhī, suī bù yǐ dào, yuè yě）」（小人は事え難くして、説ばしめ易し。之を説ばしむるに、道を以てせずと雖も、説ぶなり）。人格と能力を持たない上司の下で働くのは容易でない。部下の資質、能力、状況、感情等、一切を理解しようとしなからず。仕事上の成果もなかなか認めようとしません。しかしこういう上司を喜ばせるのは簡単です。まともな働き方をしなくても、うわべを取り繕うだけで喜んでくれるからです。不正の隠蔽に加担するようなことでもあれば、もっと喜んでくれるでしょう。

孔子はさらに続けます。「及其使人也，求备焉（Jí qí shǐ rén yě, qiú bèi yān）」（其の人を使うに及んでは、備わらんことを求む）。こういう上司に限って、仕事の上ではとにかく部下に完璧を求めたがるものです。「備わらんことを求む」とは、部下にあらゆる方面の能力を要求するということです。到底できるはずのない仕事を強要することもあるかもしれません。しかも失敗はすべて部下のせいになります。政治家ならば、すべてを秘書のせいにする、ということでしょうか。

（わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師）

【前回までのあらすじ】 李元は杭州にいる父親のもとへ行く途中、太湖のほとりにある呉江というところで子どもにいじめられている金色の目をした赤い子蛇を助け湖に放しました。そして母親のいる陳州の古里に帰る途中、再び、呉江に立ち寄って船を停め辺りを散歩していました。と、華麗な服装で身を包んだ、明眸皓齒・眉目秀麗な朱という青年の案内で、この世のものとは思われない壮大且つ華麗な宮殿に連れて行かれました。そして、この宮殿の主である老翁に会い、老翁より「あなた様は、『王の息子を救った一家の大恩人』である」と言われました。李元の前に呼び出されたその息子は、李元に深々頭を下げるとお礼の言葉を述べるのを聞いた李元は、以前父のもとに行くときに救った子蛇は、この老翁の息子であり、目の前の老翁はまさに竜王であり、自分が、今、龍宮にいるのだと悟りました。



李元は心ここにあらずでいろいろ考えていると、竜王が重ねて李元に告げました。

「一家の感謝の気持ちとして、あなた様をおもてなししたく宴会を設けました。どうぞそちらへお出で下され」

案内人について広々とした部屋に入りました。見れば、あたりは金色や青色にきらめき、竜や鳳凰の形の明かりが灯され、五色の糸で刺繍された幔幕が巡らせてあります。得も言われぬ香りが漂い、宝玉で飾られた食器が並べられ、周りには絶世の美人たちが立ち並んでいました。

李元はあまりの豪華さにたじろいでいると、竜王が旁らかたわの人に命じ、李元はその人に抱えられるようにして席に着かされました。丁度この時、妙なる楽の音が響き始め、数十人の女性たちが踊り始めました。李元の傍らかたわにいる人が李元に酒杯を捧げ持たせるとお酒を献じました。李元はまるで

夢の中を漂っているような気分でした。竜王が二人の息子に「謹んで返礼せよ」と命じると、王のふたりの息子が酒杯を掲げ、李元に献杯の礼をしました。竜王は大臣達にも同様に命じ、大臣たちも代わる代わる杯を捧げては李元に乾杯を促しました。

李元は乾杯の返礼をしなければ失礼だと思い、促されるままに次々に飲み干して、終に大酔いしてしまいました。もうこれ以上は無理と思い、竜王に「わたくしは本当はお酒に弱いので、もう倒れてしまいそうです」と告げました。竜王は侍従に李元を介添えさせ客間に戻して休ませました。

李元が酔から醒めた時はもう陽の光が明るく射していましたので、驚いて起き上がり周りを見回しますと日頃と異なる華やかな部屋で寝ていました。傍らかたわのお付きの者は李元が目をさましたのを見ると、すぐ服を着せ、口を漱がせるなどこまごました世話をしてくれました。身支度が整った頃、竜王の上の息子である朱青年がやってきました。お互いに朝の挨拶を済ませると朱青年は李元を連れて竜王が待つ部屋に行きました。

李元は竜王に言いました。

「昨夜はすっかり酔ってしまい失礼申し上げました」

「いいや、何のもてなしもできず、どうかご容赦ください。お差支えがなれば、ここで4、5日、ゆっくりご滞在されてはいかががじゃの」

「ご厚情を賜わり有難く存じます。しかし、私は父の命により、古里に帰り、母の面倒を見なければいけませんし、春の試験も迫って来ております。昨夜、下人にも告げずこちらに来てしまいましたので、彼等も心配していると思います」

「そのような事情なればお引止めは致しますま

い。大恩の返礼にはなりませんまいが、なにか望みのものがあれば、何なりと申すがよい」

「お心遣い有難うございます。しかし、日頃から私は秤心(思う通りになる、意に合う)を得られる日々であればそれで十分だと思っております」

「そなたが娘を妻にほしいとの望みならばそうしよう。ただ3年経ったら私のもとに返していただくかねばならぬかの」

竜王はそう言いながら、侍従に

「我が娘の秤心を呼んで参れ」

と命じました。李元はびっくりしました。

「竜王様、私は何も頂きませんと申しましたが…」

「先ほどそなたは「秤心」を望んでいるといわれた。私には秤心という娘がおるのじゃ。そなたの許に嫁がせよう」

李元は慌てて、

「私が秤心と申し上げたのは、試験に及第しさえすれば、私の望みがかなうという意味でした。どうして王女様を妻になどと望めましょう」

「娘は幼名を秤心と申すのだ。すでにそなたへ嫁がせることと決めたからには破談は相成りませぬぞ。もし試験に及第することを望むなら、秤心に訊ねてみて下され。きっと良い結果が得られよう」

竜王は朱青年に李元と同道し妹を送っていくようにと命じました。李元は竜王に心からの感謝の気持ちを伝え、朱青年は旅支度を整えた妹を連れ、李元を案内して宮殿の前の、竜王の船が繋がれたところに戻りました。そして朱青年は妹に別れの言葉を告げると、李元に金品とみられる包みを渡し、次のように言いました。

「私の父親は西海郡の竜で、多くの功績を立てましたので天帝の勅命によりこの辺りを自分の領海とすることが許されました。幸いこのあたりの海は水清く、波も静かで、子孫繁栄に打ってつけです。しかし、あなた様がお帰りになられましても、竜宮を訪ねたことは誰にも告げず、妹へも詳しい事はお尋ねなさいませぬよう固くお約束下さい。さもないと大きな禍があなた様に降りかかることになりましょう」

李元は謹んで朱青年の話の聞くと、深々と頭を下げ御礼の言葉を伝えると船に乗りました。竜王の船

は、来る時と同様に空を飛ぶような感じで波を蹴立てて進み、瞬間に古里へ帰る船のところに戻りました。

李元は竜王の娘・秤心を伴い自分の船に向かいました。下人の王安は驚き怪しみつつも黙って二人を船に迎えました。

「旦那様が一晚じゅう

戻られなかったので心配して随分尋ね回りました。しかし、どこにいらっしまったのかさっぱり分かりませんでした」

「私は昔の友人に湖上で出会って一緒に酒を飲んで過ごした。そして、この娘をわしの嫁に下さった」

王安は子細を詳しく李元に尋ねることもなく船出の用意ができると出航し、帰郷の途に就きました。

李元は家に帰りつくと母親にいろいろ報告し、帰郷の途中、妻にした秤心を母親に紹介しました。母親は李元の美しい嫁を見ると大変嬉しく思いました。



満柏 画

ようよう以前の普段通りの生活に戻って間もなく、科挙の試験の時期を迎えました。李元は妻に言いました。

「竜王である父上がそなたを私の妻にされた時、『私が試験に及第したければ、そなたに訊いてみよ』と言われました。明日、私は試験を受けますが、何か知恵を貸してくれるのですか」

「私が今晚、先に試験の課題を取って参りましょう。あなたはその課題で文章を作り置かれ、明日その通りにお書きなさればいいでしょう」

「その課題をどうやって手に入れるのですか」

「目を瞑って術を使うのです。では、少々お待ちくださいませ」

秤心は部屋に戻ると固く戸を閉ざしました。間もなく風の音と共に簾も幕も巻き上げられるほどの強い風がしばらく吹き続けました。一刻あまり後、秤心は戸を開けて部屋から出てくると手にした紙を李元に渡しました。李元はその紙に書かれた課題について答案を作成しました。果たして翌日の試験場で出された課題は秤心が手に入れたものと同じものでした。

試験が行われた三日の間、李元はこのようにして前夜の内に準備を済ませて試験に臨みましたので、試験は順調に終了しました。

いよいよ発表となれば、李元は、当然ながら成績優秀で及第しました。

その後、李元は陳州の僉判¹⁾に任命され、1年後に奉院²⁾に転任、両地合わせて3年の任期が満ちて、江南の呉興県の知事を拝命しました。そこで妻の秤心と従僕を伴い呉興県へ赴任しました。

任地に着いて、気持ちもどうにか落ちついたある日、秤心が突然李元に別れを告げました。

「弟が命を助けられたご縁により、3年前、両親の命であなた様に傅くことになりました。しかしながら、既に父の竜王が申した3年という期限が参りました。もうお暇をとらねばなりません。どうぞあなた様はくれぐれもお大事に過ごされます

よう」

李元は思い切れず、秤心に進み寄って抱きかかえようとした。が、その時にはもう一陣の風に乗って秤心は門外に飛び去っていました。秤心の足元に雲が湧き、雲に乗った秤心は少しずつ天に昇って行きました。李元は天を仰いで秤心を呼び、泣き続けていると、天から短冊一枚がひらひらと舞い下りて来ました。

「あなた様はまだ若くていらっしゃいます。どうか別のご良縁をお求めなされませ。そしてあなた様が大臣になられましたら、引退なされたがよろしゅうございます。私は父のもとに帰らないと重い罰を受けます。どうぞお許しくださいませ」

と書かれてありました。李元は長い間秤心を思って悲しみ続けました。

その後の三年目、李元は任期が満ち、陳州に帰って、秘書の官³⁾も授かりました。そして王の丞相⁴⁾から婿に迎えられ、累進して吏部⁵⁾の大臣になりました。

話によると、呉江の西門外に竜王廟が残っていて、これはその昔、李元によって建てられたものと伝えられています。 (終り)

■注釈

- 1) 僉判：州府の幕僚、長官の文書助手。
- 2) 奉院：各地の朝廷駐在機構。地方と朝廷の連絡窓口。
- 3) 官：県の全般の文書処理部門の長官
- 4) 丞相：君主を補佐した最高位の官吏を指す
- 5) 吏部：文官の任免・評定・異動などの人事を担当した。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、簡単なお感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

「佳人の歌」 「上邪」

報告：花岡風子

今回も楽府^注の続きで、「佳人の歌」と「上邪」を学びました。「佳人の歌」の作者は漢の武帝お気に入りミュージシャン李延年^{りえんねん}。妹に絶世の美女がいて、好色の武帝にその妹を側室にオススメする歌です。皇帝に対する、いわばコマーシャルソングのようなもの。

傾国、傾城^{けいせい}の美女という言葉はここから出ました。あらゆる美女に手を出してきた武帝は、そんなところの美女には興味を示しません、李延年は「一目見たら王都を滅ぼし、もう一目見たら王国が滅びるような美女でございますよ～」と、皇帝の好奇心をそそって売り込むのです。

李延年の思惑通り、妹は皇帝から寵愛を受け、これによって兄も出世しますが、李夫人が亡くなった後は、ご用済みとなって殺されてしまいます。李延年はこの詩で出世し、この詩で身を滅ぼしたというわけです。

歴史的背景を伺ったあと、朗読練習。皇帝のそばで揉み手をしながらコッソリと耳打ちするようなイメージで詠んで、との植田先生のコメントには笑ってしまいました。

変わって「上邪」は激しい恋の歌。皇帝に対する忠誠心を歌った歌、とも言われているらしいです。「邪」は今の漢字で「呀」という感嘆詞。「ああ、私の大切な人よ」という呼びかけで始まり、「あなたと愛し合う

ようになってからは、絶対にこの愛を途絶えさせないようにしたいものだ。山が平らになり、その為に川(揚子江)の水が尽き、夏に雪が降り、天地が合体するような、そんなことが



jiā rén gē
佳人歌
lǐ yán nián
李延年

běi fāng yǒu jiā rén
北方有佳人
jué shì ér dú lì
绝世而独立

yī gū qīng rén chéng
一顾倾城

zài gù qīng rén guó
再顾倾人国

nìng bù zhī qīng chéng yǔ qīng guó
宁不知倾城与倾国

jiā rén nán zài dé
佳人难再得

佳人の歌

李延年

北方に佳人有り

世を絶ちて独立す

一顧すれば人の城を傾け

再顧すれば人の国を傾く

寧ぞ傾城と傾国とを

知らざらん

佳人は再び得難し

起きたら、貴方と別れましょう」という。

「こんなコト言われたら日本人のオトコは引くよねえ～」との植田先生のコメントには一同爆笑。

この詩は現代北方方言では失われた入声という、詰まる強い音で韻を踏んでいて、当時はラッパを吹き、銅鑼を打ち鳴らして歌われた、恋歌らしからぬ激しい行進曲の様な歌だったらしい。

「まるで戦争の歌のようだね、でも恋もある意味修羅場だし、戦いかな？」と、植田先生のコメントは本当に面白いです。

古代は恋の歌と主君に対する忠誠心の区別が微妙な歌が多く、日本の国歌の「君が代」だって『古今和歌集』の中の詠み人知らずの一首で、ひょっとしたら恋の歌かも知れない、ナンテ聞いてビックリしました。

植田先生は数え切れない知識の引き出しをお持ちで、本当に魅力的です。毎回講義の度に先生の引き出しを全て開けてみたい！と思わずにいられません。

注)

楽府：前漢の時、民間歌謡の採集のため楽府という音楽官署が設立されたが、楽府において集められた歌謡そのものをさす言葉となった。

シリーズの最後に、元寇こぼれ話を紹介したい。

鷹島は現在は松浦市の一行政区であるが、明治維新あたりまで遡れば1889年に町村制施行に伴い、長崎県北松浦郡鷹島村になった。その後鷹島町となり、すでに1955年に発足した松浦市と2006年に合併して今日に至っている。

歴史の歯車を大きく戻すと律令制時代では肥前国松浦郡下にあった。平安時代に源氏の流れを汲むという〈源久〉がこの地に入り、〈松浦久〉と名乗り一帯を治めた。この男が「松浦党」という武士団を結成したが、水軍としての力を備え元寇でも活躍したわけである。一族は48のグループに分かれ、松浦四十八党とも呼ばれた。その中から指導力のある者が松浦党のリーダーとして全体を統括する独特な集団であった。松浦党は居住する地

域により「上松浦党」と「下松浦党」に大きく分かれる。下松浦党の中の「平戸松浦氏」は戦国大名として頭角をあらわし、関ヶ原の戦い以降領土を安堵され、平戸藩6万3千石の外様大名として存続した(上松浦党は戦国時代後滅亡した)。本拠地は平戸市にある「平戸城」であるが、この城の石垣が鷹島の阿翁から産出する「阿翁石」で造られていることは前号で述べた。

平戸藩の九代目の藩主である〈松浦静山(1760～1841年)〉は、困窮した藩の財政を立て直した名君であるが、彼の名が知れ渡ったのは江戸時代を代表する随筆集「甲子夜話」を著したことである。この随筆は大名や庶民の暮らしぶりや逸話、社会風俗、人物評、海外事情に至るまで書かれた278巻に及び大作であり、当時の世相を知る一級の資料とされている。静山は60歳くらいで隠居したあと、1821年から没するまで20年間書き続けたのである。静山はまた、17男16女に恵まれたが、じつは11女の〈愛子〉

は明治天皇の祖母である。つまり天皇家には松浦家の血がいくらか流れているわけである。

さて友人のMさんに再度登場していただく。前述の「甲子夜話」は東洋文庫から出版されているそうであるが、全20冊、6646ページもあるなかで元寇そして多くの元の軍船が沈んだ鷹島周辺に関する記述



松浦静山。水戸藩士、内藤業昌筆
(松浦史料博物館ホームページから)

がわずかしかないと、嘆いて(?) おられるのである。明治維新までにおける最大の国難ともいえる元寇についてなぜ静山は地元の大事件をしっかりと書かなかったのか、と言われるのであるがもっともである。このあたりの背景をMさんは手製の私家版「甲子夜話の謎」の中でいろいろな角度で述べられている。私家版を読んで私が思うには、一つには静山にしてみれば約550年前の出来事であり、また島民がほとんど虐殺されており言い伝えや寺社など

の資料もすくなかった中で詳しくは書けなかったのかもしれないこと。また彼は地元のお殿様とはいえ、江戸の生まれで墓地も江戸にあることからさほど筆が進まなかったのではと。

次に「日本外史」で有名な頼山陽(1781～1832年)が著した「日本楽府」について紹介したい。本書に元寇について触れられている箇所がある。この書は甲子夜話が書かれた同じころの1828年に完成している。まず楽府という言葉であるが、もともと前漢(BC. 206年～AD. 25年)の時代に民間で歌われていた歌謡を集めるために設立された役所であるが、その後楽府で集められた歌謡そのものを指すようになった。「日本楽府」はこれになぞらえて、古代から織豊時代までの歴史的な事件を歌謡風に詠じた。66の項目からなり、35番目に元寇について書かれた「蒙古来」がある。私は20年以上前、千駄ヶ谷にある鳩森八幡神社の社務所で行われていた漢詩の会に参加し

ていたとき、〈石川濯堂先生〉から「日本楽府」を習ったことを思い出す。詩吟をされている方には有名な一節だそうだ。その一部を書き出してみる。

=蒙古来=

筑海颯気(ぐき=暴風雨)連天黒。蔽海而来者何賊。蒙古来。来自北。東西次第期呑食。嚇得趙家老寡婦(南宋の楊太后)。持此擬男兒国。相模太郎^注膽如甕。防海将士人各力。蒙古来。吾不怖。(以下略)



文中の東西とは東が日本、西が南宋(1127～1279年)である。時の南宋は皇帝が幼い子供のため義母の楊太后が国政を取り仕切っていた。元は南宋の未亡人(楊太后)を脅して陥落させた(「弘安の役」の2年前の1279年に滅ぼされた)ように東の小国、日本も恫喝すればすり寄ってくると思っていた節がある。しかし相模太郎は、肝が甕のように据わった男で脅しに屈しなかったのである。そうした雰囲気が伝わってくる文章である。



頼山陽像。帆足杏雨筆(京都大学総合博物館蔵) (ウィキペディアから)

渡部昇一氏はその著書「日本史から見た日本人・鎌倉編」の書き出しで「旧制中学の漢文の教科書で、頼山陽の一蒙古来一を読んだ時の感激は忘れられない」と書いている。昭和5年生まれの渡部氏に対し、私は戦後生まれからか、さほど感激はないが時代背景が違うのであろう。

さらに元寇について書かれている古典を加えたい。それは皆さんご存知の「太平記」である。説明をするまでもないと思うが、簡単に書けば…鎌倉時代末期の1318年から南北朝中期である足利義満の將軍職就任の1367年の約50年間の戦乱を描いた軍記物である。作者は小島法師と言われているが異説もある。その第39巻に「自太元攻日本事」、すなわち蒙古襲来の項がある。内容を簡単に書けば、「蒙古軍の侵攻に到底対抗できないので、日本中の神仏を総動員して祈祷させた。その結果、突然発生した台風で元は全滅した」とある。私は、太平記に元寇のことが書かれているとは思ってもよらなかったが、考えてみれば

「弘安の役」から約40年後に書き始められているのでなるほどと思った。

話は変わって、東京に「東京鷹島会」という同郷の方たちの集まりがある。毎年6月に定例会が開かれ、100人近くが集まるという。もう20年以上続いているとか。Mさんは鷹島には1年しか住んでいないが、立派な元島民であり弟妹さんと毎年参加されているという。人口が2千数百名しかいない島の関係者が、遠く離れた異郷の地・東京で100名く

らい集まるというのは驚きである。郷里との連帯感が強いからであろう。市長が特別参加されることもあるとか。

こぼれ話の最後は、中国・大連市の郊外にある「金州」という町にあるという石碑の話である。金州は日露戦争の激戦地のひとつであり、乃木大将の長男・勝典が戦死したところである。私が勤めていた会社のある大連経済技術開発区からすぐのところにある。この街には昔「金州城」があり、千年の歴史のあるところである。その城壁の北門の跡に元寇に関する石碑があることをMさんがとある資料から見つけられた。当時あの周辺の住民も高麗王国軍か蒙古軍に組み込まされ、北九州に攻め込んだことは十分考えられ、記念の石碑の二つや三つあってもおかしくないと思われる。今夏も大連に旅行に行きたいと思うので、その際必ず見てこようと思っている。その報告はいずれしたいと考えている。

本シリーズは今回で終了するが、多くのことを知ることができたのはMさんのおかげと感謝している。最後に日中関係も日韓関係も相互にわだかまりがなくなり、真に仲良くできるのはやはり数百年の時間が必要なのかな? そうはいつでも日常の関係改善の積み重ねはとても大切なのだぞ、と思いつつ「元寇と鷹島」を終わりたい。

(終わり)

^注相模太郎：鎌倉幕府第8代執権北条時宗が幼少時に名乗った別名。(出典ウィキペディア)

▶ 文革記念館建設を提唱した巴金

1984年、巴金は東京で開催された国際ペン東京大会に出席するために、中国ペンクラブ会長として来日しました。一行は巴金を含めて4人、その中に、文芸誌『収獲』の編集者でもある令嬢の李小林も参加していました。巴金は1904年生まれ、ちょうど80歳です。李小林の随行は、父の身体を気遣った参加だったともいえるでしょう。

巴金は若いころ、アナーキズムの影響を受け、四川省の成都の家を出て上海や南京でアナーキズム運動に参加、後にフランスにも留学しています。本名を李堯棠リキョウドウと言いましたが、巴金というペンネームは、アナーキストの理論的指導者だったバクーニンのバ、クロポトキンのキンを取ってつくったといわれていますが、今回改めて調べてみると、〈巴〉は自殺した友人の巴恩波からとったものだとする文章に出会いました。そして、バクーニンとクロポトキンからとったという説は、文化大革命時代に、巴金に罪を着せるためのデマであり、事実ではないと書いています。どうもこの説の方が、リアリティーがあるように思いますが、さて真実はどうだったのでしょうか。それはともかく、御多分に漏れず、文革の嵐は巴金にも襲い、1966年から10年間ほど作家活動もできませんでした。

巴金は、文革の悲劇は二度と起こしていけないと、1986年に文革記念館を建設すべきと提唱しましたが、残念ながら実現していません。ともあれ、巴金はアナーキズムに心酔し、またエスペラントにも共感、1920年には彼も参加して上海世界語協会を設立し、エスペラントイストとしても活躍しました。

巴金は1961年、中国からの最初の作家代表団の団長として来日、1984年時点ですでに4回ほど日本に来ていますが、1984年の来日時には、文芸理論家で中国文学芸術連合会主席の周揚らも

ほぼ同じ頃に来日し、5月11日、彼らは揃って東京で開催された日中文化交流協会(1956年に中島健蔵、千田是也、井上靖、團伊玖磨らが中心になって日中間の文化交流を推進するために創立され、日中国交正常化に貢献した)主催の歓迎パーティーに出席しました。

▶ 熱気に満ちた歓迎パーティー

パーティーでは一目、巴金に挨拶し名刺を交換したいという人たちが巴金の前に並びました。巴金は椅子に腰かけ、そのそばに男の人が立ち、その人が巴金に代わって名刺を差し出していました。私も巴金に挨拶すべく並びましたが、後ろに何人かいるため、ただ挨拶し名刺を交換した程度でした。

そのパーティーは、当時の友好的な日中関係を表し、とても熱気に満ちていました。文革中の閉ざされた日中関係に終止符を打ち、開放経済体制に入った新しい中国との緊密な交流関係を反映するかのよう、日本を代表する多くの著名な文化人たちがパーティーに参加していました。

今回、巴金の来日時を確認するために、日中文化交流協会に尋ねたところ、広報部の方が8頁に亘る記事をコピーしてFAXしてくれました。

現在でも日中文化交流協会の月刊の会報「日中文化交流」は、主要な行事の参加者の名前が逐一、アイウエオ順に記載されていますが、この時も多くの人たちの名前が記載され、私の名前も記載され

ていたのを今度初めて知りました。

参加者の名前を眺めていると、鬼籍に入っている人もかなりいますが、文化芸術関係の著名人が綺羅星のごとく紹介されています。大作家である巴金が出席するというパーティーとはいえ、いかに当時の日中関係が熱い状況にあったことがわかります。

そんな著名な方々を全員記すと、この頁はその名

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」
エスペラントイスト巴金の来日

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

前で埋まっただけか、と、とりわけ一般的に名前が知られている人たちだけに限って紹介してみましよう。

日中文化交流協会会長の井上靖を筆頭に、千田是也、山本健吉、東山魁夷、野間宏、水上勉ら協会の常任理事の他に、井出孫六、岩波雄二郎、大原富枝、岡崎嘉平太、岡本太郎、奥野健男、尾崎秀樹、加山又造、木下順二、清岡卓行、熊井啓、黒井千次、近藤芳美、阪田寛夫、佐々木基一、佐田稲子、城山三郎、高木東六、高峰三枝子、陳舜臣、東野英治郎、中園英助、中野孝次、夏堀正元、奈良本辰也、古井喜美、宮本輝、三好徹、森繁久彌、山本安英などの名前が並んでいます。まさに日本を代表する文化人たちが参加していたのです。

また井上靖の『楼蘭』のエスペラント訳『Loulan』がその日に完成し、井上が巴金に贈呈した関係もあってか、エスペラント界の主要な人たちも参加しています。

▶ 歓迎パーティーで見た有吉佐和子の喜び

この会報に掲載された写真のキャプションを見ると巴金は、「友情に対しては友情で応えねばなりません。しかし、みなさまのこのような大きな友情に、私たちが応えられるだろうか・・・」と挨拶しています。また周揚は、「私は五年ぶりに日本の土を踏みました。長年の友人であり、同志である巴金氏と同じ壇上でこのように多くの人々のあたたかい友情に見守られていることは、感無量です」と挨拶したと記されています。

この他にも会報には、井上靖や千田是也、東山魁夷、陳舜臣、佐田稲子らが巴金、周揚と親しく言葉を交わしている写真が掲載されています。このような今は亡き日中の文化人たちの懐かしくも深い友情を示す写真を見ていると、改めて現在の冷めた日中関係が浮かび上がってきます。

著名な文化人が大勢いたパーティーの中に私もいたわけですが、印象に残っているのは高峰三枝子がいいたなというぐらいです。しかし、実はこのパーティーで今でも鮮明に覚えているのは、今は亡き有吉佐和子の燥ぎっぷりです。

「才女」と言われ、女流作家として華々しい活躍

をしていた有吉ですが、周揚が壇上で挨拶している時、会場中央のやや後ろの方にいた有吉が周揚に向かって大きく手を振り、声をあげたのです。会報「日中文化交流」を見れば、有吉と周揚が言葉を交わしている写真があり、そこには「5年前には、杉並のわが家を訪ねてくださいましたね」と有吉が語り、周揚が「あのときの抹茶の味は忘れられません」というキャプションがついていました。有吉の燥ぎっぷりは、そのような付き合いがあったからでしょう。しかし、それを差し引いても異常な感じを受けました。

1961年の最初の訪中の時、有吉は、ある人から「着物はなるべく地味なものを」と言われたそうです。しかし中国での歓迎レセプションではその忠告を無視したようです。

その時の訪中団長だった亀井勝一郎がこんなエピソードを書いています。

「今度の旅行中、有吉さんが最も人気があった。宴会の時は、華やかな和服を着るので会場が一際あかるくなるし、〈絶世的美人〉といふ名が高い。我々の世代とちがって、ものに臆することなく、闊達に振るまうので誰からも好意を持たれたやうである。(中略) 郭沫若氏との会見後にも記念撮影したが、そのとき郭氏は、有吉さんに向かって〈こっちへおいで〉と言って自分の傍へ連れて行った。今度もいよいよ撮影する瞬間、私と並んで立っていた周総理は、あっといふ間に有吉さんの傍へ行ってしまった」(『中国の旅』)と記しています。

また、かつて私が見た写真の中には、二列に並んだ集合写真の前列中央にいる周恩来の隣に有吉がいました。なんでもその時は、一番端にいた有吉が撮影直前に周恩来の傍に駆けていき、写真に納まったといわれています。有吉の、ものおじせず、積極的な性格がそうさせたのでしょうか。

また周恩来とのエピソードでは、有吉が周恩来に、「今日の私の着物の柄が牡丹(中国の国花)でなくて残念です」と言ったところ、周恩来は「牡丹はあなた自身ですね」と返したということです。周恩来もなかなかユーモアがありますね。

(続く)



冬虫夏草を囲んで値決めする様子



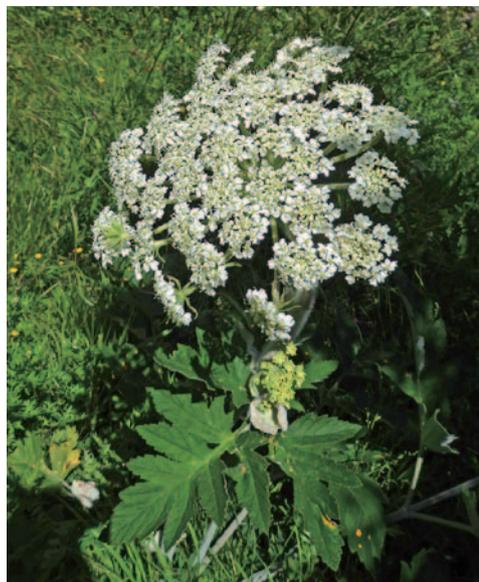
泥を落として冬虫夏草のサンプルを検査する

写真で見る冬虫夏草はイモムシの姿で長い尻尾を持っていますが、中身は菌類の粉です。この菌類は冬虫夏草菌 (*Cordyceps sinensis* Berk Sacc) と呼ばれるバツカクキン科に属するキノコ的一种だそうで、菌から伸びた長い尻尾は子座(子実体)と呼ばれます。

夏、標高4000m前後の高原に咲き乱れる花に産み付けられたコウモリガ科の蝙蝠蛾 (*Hepialus armoricanus* Oberthur) の卵は幼虫に孵化して土に潜り、植物の根の栄養分を吸収しながら成長します。この時に冬虫夏草菌が幼虫の体内に侵入して幼虫の栄養分を吸収しながら育ち、やがて幼虫の形を残したまま、中身は全部菌にとって代わります。そして初夏になる頃、菌が発芽して長い尻尾を伸ばし小さな頭(菌の子

実体) を地面に出します。これを目印にして採集された物が我々が目にする冬虫夏草です。しかし冬虫夏草は中々見つけれられません。四姑娘山周辺で冬虫夏草採りを誘われた時に聞いた話では、セリ科ハナウド属 (*Heracleum* sp.) の一種の傍に冬虫夏草が多いそうで、採集する人達はこのハナウド属の一種が生える場所を手掛かりにするそうです。

冬虫夏草は中国を代表する漢方薬で古くから愛用されています。私の友人の四川大学医学部の内科教授は日本や米国に留学して西洋医学を学んで



産地価格 90 元前後の冬虫夏草

セリ科ハナウド属の一種 (*Heracleum* sp.) の近くで冬虫夏草が採れる。

銀行門前で取引された冬虫夏草を見物したり、情報交換する関係者たち。

いますが、冬虫夏草を何にでも効く薬として重宝しています。用法は一般的に煎じて(ギャロンチベット族は85度位のお湯で30分位)飲みますが、料理に入れて食べたり、煮出したお湯に手足を浸したりもします。

冬虫夏草の産地での取引価格は毎年の出来不出来や需給関係で変わり、上海等の大消費地では数倍になるそうです。

2000年代に入って以降、他の漢方薬を差し置いて冬虫夏草の価格だけが毎年のように値上がり続けた結果、昔からの薬草採りは他の薬草に見向きしなくなり冬虫夏草だけを採るようになっていました。また一般の農家や町の他の職業の人達の一部も初夏から夏に掛けて本来の仕事を休んで山に入り高騰した冬虫夏草を採るようになりました。そのため当地では、冬虫夏草採りは、夏のお寺の伝

統的な行事の開催日を変える程の、毎年の一大イベントになっています。

冬虫夏草の売り買いが始まるのは5月に入ってからです。この時期になりますと、掘って日が浅い泥を付けたままの冬虫夏草を囲んで値決めする姿が銀行門前や周辺の彼方此方で見られます(業者の取引は一回数万元とか10万元になりますので)。なお産地で泥を付けたまま取引するのは、今年産である事を確認したり、妙な細工(折れた物を繋いだり中に砂を詰める等)をチェックするため、取引成立後にワイヤーブラシで泥を落とし乾燥させます。しかし今年の丹巴を含む四川省北西部で産する冬虫夏草は質が悪くて(中空の物が多い)相場が半値に下がっています。このため採取量が少なく、取引状況は賑わっていません。少し寂しい雰囲気ですが、丹巴での取引状況を写真でご紹介しました。



上の2つの写真は、取引された冬虫夏草の泥をワイヤーブラシで落としているところ。偽物を防ぐため泥付で取引する。写真右の八角形の容器の中は前年産の冬虫夏草が入っている。



泥を付けたままの冬虫夏草

●大川さんのホームページはこちら

<http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▶お知らせ：女王谷のHP

(<http://rgyalmorong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ(MP4形式8MB前後)1分余り×15本を追加しました。日本語HPに入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。

(<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)

東西文明の比較 (6)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

最近、秋田県で山菜採りに来ていた老人が4名、熊に襲われお亡くなりになったというニュースがありました。縄文人たちも同じような危険を押しして食料を調達していたのかと思うと大変だったなあと考えさせられました。と同時に、縄文時代から今も続く「山菜採り」が素晴らしい伝統であると思うようになりました。

今回は、縄文時代から弥生時代への移行について触れましたが、私の大好きな「縄文時代」にもう少しお付き合いください。

縄文時代の足跡

縄文時代は「狩猟・漁労・採集」、そして「定住」「土器製造」に集約されると思います。縄文時代区分は土器で仕分けしていますが、列島最古の文化は後期旧石器に遡るといわれています。

人類最古の生活痕跡は8万年～4、5万年前の中期旧石器時代です。日本では、1949年に岩宿(群馬県みどり市笠懸町)で黒曜石の槍の穂先(槍先形尖頭器)が相沢忠洋氏によって発見されました。約35000年前～13000年前に属する現代型ホモ・サピエンスが残した後期旧石器です。東北アジアと共通の斜軸尖頭器やスクレイパー、円盤形石核が特徴です。

私たちの祖先であるこれら旧石器時代の人びとは動物を追いながら「遊動生活」を基本とし、墓地もありません。石斧・台形様石器・ナイフ形石器など、日本列島固有の道具類が誕生。

大陸文化から独立した地域圏を形成しました。その分布範囲は、北海道から九州鹿児島にいたります。自然環境・地理的環境に順応した地域的なまわりは、その後、縄文以降の日本文化として現在まで継承されています。それら縄文の文化圏は、日本を六つに分けています。北海道・東北文化圏、北陸・

東北文化圏、関東・東海文化圏、近畿・中国・四国文化圏、九州文化圏、南西諸島文化圏と呼ばれています。これらの文化圏を横軸に、時代区分を縦軸に置くと縄文時代が立体的に見えてくるのではないのでしょうか。

縄文時代区分を記してみます。

1. 草創期/13000～10000年前：晩氷期、世界最古の土器の誕生
2. 早期/10000～6000年前
3. 前期/6000～5000年前：丸山山内遺跡(約1500年間続いた大規模集落)
4. 中期/5000～4000年前：火焰土器(国宝指定)
5. 後期/4000～3000年前
6. 晩期/3000～2300年前：再び寒冷期に入る

土器の誕生

約2万年前の最も寒冷であったウルム期を過ぎ、13000年前の晩氷期になると、気候は急激に温暖になりました。ゴヨウマツ、モミ、ツガなどの亜寒帯針葉樹林帯が姿を消し、カバノキ、ブナ、ナラなどの落葉広葉樹林が増えました。それに伴い、ヘラジカ、ナウマンゾウ、オオツノジカなどの大型獣が減少して、ニホンジカ、イノシシなどが増えました。このような自然の変化を背景に、およそ12000年前ごろから日本列島には新しい文化が芽生えました。その動きの顕著なものが「土器の出現」であり、「石槍から弓矢の変革」です。弓矢による狩猟方式の変化は、先の動物の変化(動物相)と関係がありました。小型で動きの速い動物には弓矢のほうが有利です。土器の出現は、晩氷期の食用植物が豊富(植物相)になったことと深い関係があります。土器を持つ生活様式の確立は、竪穴住居の誕生・普及とあいまって、「安定的で定住的な社会」を作り出す要因となり、弓矢による組織的な狩猟の発達、豊かな食生活をもたらしました。

この縄文文化は、世界でも希に見る定住的で豊かな社会として8000年以上続いたのです。

日本列島に広がった落葉広葉樹林からは豊富な食用木の実が採集できました。ドングリ、クリ、クルミなどの栄養価の高い木の実やウバユリ、カタクリ、ワラビ、ヤマイモなど、野生のイモ類が豊富に採集

できました。これら木の実やイモ類は土器の出現で「煮炊き」することが可能になりました。「煮炊き」は、殺菌作用があり、栄養摂取を容易にするばかりか、木の実やイモ類の澱粉質が豊富な植物類とシカやイノシシなどの獣肉類と混ぜ合わせた美味で栄養価の高い食事を可能にしました。食器類は樹皮をはいで作った容器を使用しました。

初期の縄文土器の最大の特徴は、煮炊き機能にすぐれた「深鉢」容器にあります。現在のところ、草創期の縄文土器は世界最古です。

縄文土器と同じ機能を持つ土器には、北欧から東欧、ウラル、シベリアの櫛目文土器くしめもんどきがあります。中国江西省の仙人洞や朝鮮半島からも発掘されています。北緯30度以北の定住化傾向の食料採集民族に多いようです。これに対してムギ作の農耕民族である西アジア地域の土器は、食材や飲料水の貯蔵用が多く、ナンやパンを焼くためのもので「煮炊き」用土器はありません。

縄文人は農耕民族だった？

かつて、縄文時代は「狩猟・漁労・採集文化」で、弥生時代になって「水田稲作文化」になった、という説が常識でした。私も学校でそう教わりました。更に「弥生人が侵入してきて縄文人を山に追いやり、平野部を占拠して水田を作った」とも。

しかし、最近の調査・研究によって、その説が崩れてきました。その根拠は・・・縄文晩期には畑作農業が始まっていた証拠が出てきたのです。縄文晩期の遺跡から、日本では自生しないはずのソバの花粉や種子が見つかりました。これは、大陸からソバがもたらされ、食用のために栽培されていたことを示しています。

では、誰が縄文人にソバの栽培を教えたのでしょうか。

縄文後期から晩期にかけては、世界的に気候が寒冷化し始めた時代です。それに伴って、人々の移動が激しくなったと想定されます。そうした時期に北東アジアから、ソバとその栽培技術を携えて、日本列島へ来たのではないかとされています。

また、ソバのほかにもアワ、ヒエ、大豆、大麦、エンドウなどの種子が、各地の縄文中期から晩期の地

層から見つかっており、雑穀や豆類の栽培も、縄文時代から始まっていたようです。さらに、北九州の唐津市菜畑遺跡で、約7000年前ごろからイネの花粉が見つかるようになり、このころから稲の栽培が始まっていたことを示しています。

では、どのような畑作であったのか。

それは「焼き畑農業」です。縄文時代から弥生時代への移行が、順調に進んでいた証拠です。縄文・弥生の文化が共存していた時期がありました。これは、縄文時代にすでに農耕が始まっていたため、水田稲作の弥生文化を受け入れ易かったからではないかといわれています。

最近の発掘調査では、九州北部で始まった水田稲作が、わずか300～400年で本州北端の津軽半島まで伝播したことがわかってきました。東北の縄文人は、なぜ寒冷地に適さない稲作を取り入れたのでしょうか。約2000年前の縄文晩期末から日本列島はふたたび寒冷化が始まりました。海はやや後退し海面が低くなったことで、海岸部の肥沃な低地が露出しました。水田稲作には適した土地が広く確保できたのです。寒冷な気候といっても、稲作には影響が少なかったようです。肥沃な低地は沼でしたから、稲作以外に利用できなかったこともその理由でしょう。

しかし、稲作を始めたといっても、縄文時代の中心はあくまでも「狩猟・漁労・採集文化」でした。稲作が文化の中心になったのは、戦国から江戸時代です。ご存じの通り、大名の勢力の尺度や武士の報酬を「石高」で表示するようになってからです。

結論的にいえば、「弥生人」と呼べる人が大陸側にいて、日本列島に大挙して渡ってきたのではなく、縄文人が水田稲作や食生活などの変化によって形質が変化して弥生時代の人、すなわち弥生人と命名したということです。もちろんこの時期に、少数の渡来人が来て大陸文化の一端を伝播してくれたことは間違いありませんが、それらを「文化」に昇華させたのはあくまでも縄文人だといえるでしょう。

次回は「縄文人の一生」について書きたいと思います。

(続く)

「大粗坑古道」を歩いてから九份の宿に戻るには「猴硐駅」から電車に乗って「瑞芳」駅経由の予定だった。「小粗坑古道」を歩いて「猴硐駅」に行けるなら、今から「大粗坑古道」の入口を探してウロウロするより、この「小粗坑古道」に行くほうがよいだろう、と思った。時に9時半だった。

灌木の道は、すぐに草地の道になり、展望が開けた。朝食前に登った「基隆山」が九份の街を裾に從えて、そびえていた。雨が降るのが近いのか、山の肩に雲が湧いていた。大して登らないうちに、坂を上り詰めて峠状の場所に着いた。ベンチが有り一休みする場所だ。ここからは下り坂となる。

ベンチに座って、甘すぎるパンをかじりながら近くを見わたせば、細い踏み跡が山稜を登る方向に有った。そして「→小粗口山200m」と書いた札が掛っていた。すぐそばに未知の山頂があるらしい。200mなら近いから行ってみよう、と藪っぼい踏み跡をたどる。ススキのような草をかき分けて歩くと、ほんの5分ほどで「小粗口山485m」と書いた標識がある、開けた場所に着いた。山頂という感じでは無かったが山を一つ稼いだ気がして少し満足だった。

「小粗口山」には長居せず、すぐ峠状のところまで戻る。いよいよ山越えの下り坂になると、今までと違って樹木が密集した山道になった。陽が差さないためか、湿っていて登山道全体がひどく苔むしている。



小粗坑古道から見た九份の街と基隆山



山神様のほくら、コンクリート製である

部分的には、「基隆山」の下山路より滑りやすいところが有る。

履いている靴は、本格的な登山靴ではないので、摩擦が少し弱い。里山だから登山用の杖は要らないと思い、持ってこなかった。杖があれば滑り止めになり有用だったろう。しかたがない、転んで尻餅をつけば臀部が苔色染めのズボンができるまでだ。慎重に足を出して歩を進む。緊張の連続というわけでは無いが、結構気を遣って下り坂を進んだ。

山の様子は、伊豆の山か、九州の山といった感じで、照葉樹の森になっている。一般に鉱山や温泉が附近にある山、または有った山は、燃料や坑木の需要があるので手近なところから、樹木を切り出すことが多い。なので巨木は見当たらず比較的若木が多かった。おおむね照葉樹の下は暗いが、天気が曇りのため、さらに暗い。道の随所には自然観察用の、「植物案内板」が有った。私は1基ずつ立ち止まって案内板の花の絵を見たが、時季外れのためかそのような花は登山道付近には無かった。それでも、道端にはなじみの無い草や木の花が咲いていた。

10時半、古ぼけたコンクリート製の遺跡に出会った。説明板によると名前は「山神廟」というおやしろうだった。文章概略は1895年、日本が台湾を植民地化すると、台湾土着の信仰は排除され、日本式の神社を礼拝するように強要された。しかし、鉱山

の労働は危険を伴うため、例外的に土着鎮守様である「山神」を認めた。鉱夫たちのお守りとして労務関係がうまくいくようにとの配慮だ。元来「山神様」は純金像だったが、廃坑となって人々が去ると、純金像は盗まれて今は無いそうである。

時々石の階段になる。外傾した石段は摩擦で角が丸くなり、いやらしい。踏面の足乗せ部はどれも苔だらけ。転倒防止のため、たくさんのくさび形のキズを一面に穿った階段もあった。しかし歴史を感じさせる階段は、穿った時には滑り止めとして機能していただろうが、今は苔むして気休め程度だ。

今日は日曜日なので、何人かの登山者に会うだろうと思っていた。だがここまで誰にも会わず、寂しげな山道だった。かなり下ってくると車の音が聞こえるようになる。眼下に木の葉を透かして屋根が見えてきた。とうとう人家のあるところまで下りたのかな、と思った。屋根が見えてからすぐに人声が聞こえると、4人の女性が登ってきた。みな登山杖を持ち、鮮やかなザックを背負い、スカートからタイツの足を出した山ガールスタイルだ。

先頭が「早^{ゾー}」と声をかけてきた。

二番目がもう時刻は遅いという訳か「不早^{フーゾー}」と茶々をいれる。

ここまで歩いて思った。登山道は苔むしているし、誰にも会わないので、使われなくなった遊歩道か、と。しかし、登山者が登ってきたということは、見捨てられた遊歩道では無かったようで、ちょっとほっとした。

上から見た屋根は人家では無く、すでに廃屋の「小粗坑分班遺址」という鉱山の遺構だった。この場所はちょっとした広場になって、数人の女性が休んでいた。出会うのは女ばかり、男衆は来ないとこるなのか？



分かりづらいが、滑り止めの小孔を穿ってある石段

展望台への案内があったので行ってみた。山の腹を巻いている草深い道を10分ほど歩くと、太い角材をスノコ張りに仕立てた立派な展望台に着いた。断面が40cmも有りそうな角材がベンチとしておいてあった。「展望お立ち台」に立つと、残念ながら霧が立ちこめてほとんど見えない。遙か足下にぼんやりと見えて流れる河は、くもりガラス越しの絵を見るようであった。河と平行して曲線を描く道路と鉄道線路が見えた。折しも列車が川辺に沿って動いていたが、解像度の低い動画のようだった。

「小粗坑分班遺址」まで戻り、下山を続ける。間もなく山道がコンクリートの林道に変わり、遊歩道は終わる気配となった。さらに進むと、車の行き交う幹線道路に出た。狭い駐車場と「小粗坑古道」の

立派な案内板があった。ここで11時20分だった。

案内板によると「小粗坑古道」の「難度等級」は5段階の3で、「必備装備」には、雨傘と登山杖が記載されていた。傘はとにかく、登山道は滑るので杖の必携はもつともだ。

このあとは、川沿いの車道を20分ほど歩き、11時50分、ゴールの「猴硐^{ホウトン}駅」に着いた。「猴硐^{ホウトン}駅」は石炭産業盛んな頃の設備が、廃墟となっていたがそこを観光遺跡として



山ですれ違った女性たち。滑るので杖は必携



観光客で賑わう猴硐駅

利用していた。建物の一部は博物館になっていた。

それより^{ホウトン}猴硐は「猫村」で有名になっている。日本の台湾ガイド本にも載っているのだから、行ったことのある人、知っている人も多いただろう。

中国人を乗せた観光バスが、バス専用駐車場に並び、賑わっている。駅の周りは、ノラ猫どもがゆるゆるとくつろいでおり、なぜか数匹のノラ犬と共存していた。猫や犬をバスできた観光客がカメラを構えたり、撫でたりで一大遊園地化している。

私は「^{ハイキング}健行」目的の結果、^{ホウトン}猴硐駅に行ったのだが、日本で計画したときには、^{トン}猴硐と猫村は同じ場所とは思わなかったので、猫村見物は余得である。

「九份」の宿に戻るため、猫村見物は早々に切り上げ、駅で切符を買い次の駅の「瑞芳」まで電車に乗った。^{トン}猴硐駅は台湾東沿岸を縦貫する幹線と、盲腸線のローカル線の「平溪線」が通る。乗った電車は「平溪線」の電車で、沿線にある観光地からの乗客で満



ボランティアで日本語案内をする許さん（瑞芳駅で）



猫注意の交通標識

員だった。家族連れや若い二人連れが主な乗客である。台湾ではこのような気軽に楽しめる行楽が根付いているのだなと感じた。

日本に帰ってから小田急線の駅ポスターで「江之電、平溪線」は提携関係に有り、相互に特典切符があることを知った。これはなかなか面白い企画だ。

瑞芳駅に着く頃には、雨が降り出した。山で降られなくてよかったと思った。時間が少し余ったので「瑞芳」駅周辺をさまよったが大した収穫は無かった。雨が激しくなったので、すぐに駅舎に逃げ込んだ。

「瑞芳」駅には2010年にも来たことがある。その時に駅構内で、日本人のために日本語で案内をしていた老婦人がいた。今回も同じ場所でガイドをしていた。そばに行って話を聞いた。名前は許坤山さん86歳。毎日ボランティアで観光案内所に詰めているという。許さんのような日本語教育世代は少数になった。いつまでもお元気だと願う。

九份で2日目の夜を過ごしてから、翌日信ちゃんの待つ「台中」へ行った。以前は半額だった新幹線の敬老割引(65歳以上)が、外国人には適用されなくなり、がっかりした。

次回では、台中に移る。

(続く)



雨に濡れた九份夜景

中国・義烏市でパン作りの指導をする IV

杉野 一

ホテルでのパン作りの仕事は順調でした。そして義烏市滞在期間が長くなるにつれてホテルの皆さんと親しくなった事もあって、海洋飯店でも忘年会を私の為に開催してくれたり、日本人のツアー客も増えて来て楽しい日々でした。

或る時、義烏の女性の結婚式がホテルであり、私と、私がパン作りで指導した女性二人が招待されました。この時の式は盛大で、200人ほどの客でホテルはごった返し、大変な騒ぎで、ホールで大声で歌う人もあり、お祭騒ぎでした。義烏の女性に「女性は何歳くらいで結婚するの?」と訊いたところ、女性は22歳までに結婚するとの返事でした。日本では結婚年齢がどんどん上がって来ていますので「へえ!?!」と思ったものです。因みにこの年は、干支でいうと戌年だったので、「戌年は結婚する人が多いのですか」と重ねて訊いてみたところ、戌年は戌年でも、後半に結婚する人が多いのだそうです。その理由は、「戌年の次は猪年で、猪年に生れた子どもは食べるものに苦労しないで生活できるようになる」からだそうです。

さて、義烏市のホテルでパン作りを指導をするようになってから7年経ちました。

5月号にも書いたように、5年目と6年目にホテルから、売り上げに貢献したという理由で表彰されたりしながら、私は義烏に住む地元の人たちとも仲良くなりました。そこで、彼らに義烏の名産品はどんなものがあるのかを訊いたところ、「棉」と「砂糖」とのことでした。その他、「王様のミカン」と言われる、小さいけれど糖度が14%というミカンが評判でした。2トントラックにいっぱい積んで道端で売っていて、通りがかりの人たちが喜んで買って行きます。兎に角果物の種類も多く、どれもこれも500gが2元から3元(30円から50円)という安さで購入できびっくりしました。



ビール祭にて

また、夜市が立つというので案内して貰いましたが、これが又出店数3,000店という規模の大きさです。往きの道が2通り、帰りの道が2通りで合せて4通りで、それぞれの通りに屋台が1.5kmに亘って夜市に並ぶのですから、ご覧にならないとその広さは一口では説明できません。夕方6時に開店し、終わるのは深夜の1時から2時になります。昼は昼で別の所で朝8時から夕方5時まで市場が営業していますから、言ってみれば義烏では、一日中、モノの売り・買いが行われているといっただよいでしょう。

また買い物の仕方が日本と異なり、相手の言い値で買うととんでもない大損をすることになります。商品の販売の様子を見てみると、買い手は先ず売り手の言い値の半分くらいに値切るところから始まっているようでした。品物は昼の市場の売れ残りが多そうですが、「義烏では新しい商品が出ると翌日にはもうそのコピーが出回っている」と言われるようなところですから、商品の販売合戦はなかなか大変な所です。

義烏は私にとっては異国の街ですから、住んでみると、やはり日本では経験したことがないこと、いろいろな経験して人々の生活も少しずつ分かってきました。日本で60年間パン製造に関わり、退職してからそのパン作りで思っても見なかった中国での生活を体験することになりましたが、中国人の友人が増え、それぞれ楽しい人たちで自分の人生を豊かにしてくれた貴重な経験でした。

(終り)

2016あさおサークル祭 5月28日(土)・29日(日)

I「アンデスの民族楽器・ケーナ演奏会」5月28日(土)15:30~16:30 大会議室
出演:山下孝之とケーナ教室メンバーたち

II「論語・講演会 現代に生きる孔子の言葉・論語から平和を考える」
5月29日(日)10:30~12:00 視聴覚室 講演者:植田渥雄(桜美林大学名誉教授)

III「ボイストレーニングをして、日本の歌を美しく歌おう!」
5月29日(日)13:30~15:00 視聴覚室 講師:Emme(エメ)(歌手)



5月28・29の両日、川崎市の麻生市民館で、市民館利用団体による、恒例の、「あさおサークル祭・2016」が開催されました。'わんりい'は、表題の3つの催しで参加し、それぞれ盛会で、年に一度のサークル祭を十分楽しみました。

「アンデスの民族楽器・ケーナ演奏会」

ケーナ演奏で年々力をつけたケーナ教室の皆さん、今年はカラフルなアンデス地方の肩掛けを肩にし、ケーナの音色に南米の民族楽器・チャランゴ¹⁾、サンポーニャ²⁾、カホン³⁾などが加わって、演奏会の雰囲気も音色も豊かになりました。特に、不思議な楽器・カホン、見たところはただの四角いミカン箱のような木製の箱で、演奏はこの箱に跨って叩くのですが、叩く位置によって音色が異なり、時に硬く、時に柔らかな音色が心地良く響き、より一層アンデスの雰囲気盛り上がったようです。(報告:田井光枝)



ケーナ演奏の皆さん

[注] 1)チャランゴ:アンデスの弦楽器 2)サンポーニャ:小さな笛を横並びにした南米アンデス地方の民族楽器 3)カホン:楽器自体に跨って演奏される箱型の打楽器



「ボイストレーニングをして、日本の歌を美しく歌おう!」

サークル祭に初めて参加の、「ボイストレーニングをして日本の歌を楽しく歌おう!」の講座が19名(内13名が初参加)の参加で開催されました。



トレーニング風景

元気澆刺の講師Emmeさんのご指導の下、自分の体が楽器だと思って!というお話で始まり、ストレッチ等軽い運動をしながら体を十分ほぐした後、胃やお腹辺りの筋肉を意識しながら、日頃出す事のない超低音から超高音まで大きな声を出してトレーニングしているうちに声が出易くなっていきます。

顔の筋肉を柔らかくしたり滑舌をよくするトレーニングもして身体が楽器になったような気分で、準備した歌「茶摘み」と「夏は来ぬ」を楽しく歌いました。初めて参加された方々から皆さん「初めての経験だったがとても楽しかった」との感想を頂きました。

(報告:鈴木千佳子)

現代に生きる孔子の言葉——『論語』から平和を考える

花岡 風子

5月29日あさおサークル祭2016年にて植田渥雄先生の講演が行われました。30名ほどが集まり、植田先生の語る魅力あふれる『論語』の世界に引き込まれた1時間半でした。植田先生はお話の中で、『論語』の知識を以てオバマ大統領の話の聞くと非常に良くわかると言われたので、私も改めてオバマ大統領の広島演説を聴き、所々、成程と納得した次第です。

以下、講演で得た知識と感想をまとめてみました。

※孔子とはどんな人物？

孔子とは、中国春秋時代の魯の国の人。今から2500年前に活躍しました。武力を否定し、仁義と礼節に基づく政治を主張。おなじみ儒家の元祖です。儒家は秦の始皇帝に徹底的に弾圧されるも(焚書坑儒)、その後、漢王朝以降、歴代王朝の基本思想となり、日本の歴史、制度、文化にも、大きな影響を与えています。

※春秋時代とは？

春秋時代とは、周王朝の権威が衰え、大小様々な国が乱立し、互いに覇権を競い、大いに秩序が乱れた時代。孔子が編纂したと伝えられる『春秋』という、魯の国の歴史書が書かれた時代なので、後に春秋時代と呼ばれることに。春秋とは四季、日月、時の流れを表す言葉で、日本の雑誌『文藝春秋』はここからきています。

※『論語』とは？

『論語』とは、主に孔子と弟子たちの問答集。成立年代、編集者は不詳。内容は項目順に述べられているわけではないので、どこからでも読める。

※『論語』にみられる、孔子の平和主義

『論語』の中で、今回、「孔子の平和主義」をテーマに植田先生が紹介してくださったのは以下の四章。一つ一つ意味を辿ってみます。

1. 魯の国の貴族と孔子の問答。

「もし悪い奴を殺して、いい奴だけを残したらどうであろう？」

孔子の答え。「あなたが政治をするのに、どうして人を殺すという手段を用いる必要がありますか？ あなたが良い人になれば、民も良くなります。君子の徳は風、民の徳は草です。草は風に当たると必ず伏せましょう」

◆悪い人間を抹殺すればそれで良い、という考えを現代人も捨てきれません。

それに対して孔子は、悪を殺す必要はなく、あなたが変われば世界は変わる、と言っています。全て自分次第。先ずは自分から正しなさい、と諭しています。正に哲学！

2. 次に子路という勇猛タイプの弟子が質問します。

「もし先生が軍隊を率いるとしたら、誰と組まれますか？」と。

孔子の答え。「素手で虎を倒そうとするような無謀な奴とは組まんね。いざという時には恐れることを知っている人、外交、戦略を用いて戦いを防ごうとする奴と組むね」。

◆孔子は人を見て法を説くスーパー先生。弟子の能力や性格によって、その時々によって答えを変えて教えています。普段は勇気が大切だと解きつつも、つい勇み足になる性格の子路にはこのように答え



ているのです。

外交によって防げる戦いはしない、との考えはオバマ大統領の言っていることと一致しています。

3.次に子貢という知的で雄弁、人間的にも出来た人であった弟子が難しい質問をぶつけます。

子貢が政治の要点とは何かと孔子に問いました。孔子の答え。「食糧を十分にすること、軍備を十分にすること、民衆との信義を確立することだ」

賢い子貢はありきたりの質問をしません。続けて質問します。

「どうしてもやむを得ない事情によってどれかを捨てるとしたら、この三つのうち、どれを先に捨てますか？」と。

孔子は即座に「軍備だ」と答えます。

子貢はまだ食い下がります。

「どうしてもやむを得ない事情でどちらかを捨てるとするなら、この二つのうちどれを先に捨てますか？」と、師を問い詰めます。

「食糧だ。食料がなければ、人は死ぬことになるが、(たとえ食料があったとしても)昔から死はすべての人間のまぬがれないところである。しかし、もし人民に信頼の心がなかったら、人間として社会生活を送ってゆくことはできない」と。

◆「信無くんば立たず」は政治家故三木武夫首相、

小泉純一郎元首相が座右の銘としていた言葉らしいです。これも『論語』が原典だったのですね。天災など、政治の力ではどうしても救えない生命はある、しかし政治に対する信頼や民衆間の信義があれば、復興は出来る、と言っているのです。2500年前の言葉とは思えないほど、生き生きと現代に通じますね。

4.これも子貢の質問です。

「人として生涯かけてやるべき事を漢字一文字で表すとしたら何か？」との問いに「あぁ、それなら恕じよだなぁ」「自分がして欲しくないことを人にしないことだね。」と答えています。

◆「恕じよ」とは、許すこと。人として最も大切なことは寛容の精神だと言うわけですから。と言ってもベタベタグニャグニャつかみどころのないような人が良いと言っているわけではなく、「自分がしてほしくないことは、人にもしない」という、柔らかい心と固い意志の両方が必要、ということをお説いているのだと植田先生から教わりました。

『論語』の世界。実際に聞いてみると、まるで孔子が古代から今を覗き見てコメントを発しているような錯覚に陥りました。日本人の古典離れで、忘れられがちな『論語』ですが、これを機に、もっともっと知りたいと思いました。

◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!**

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう!!

▲7月の講座: 28日(火) } まちだ中央公民館・音楽室 I
▲8月の講座: 23日(火) }
▲時間 10:00~11:30

★動きやすい服装でご参加ください

- 練習曲: 「ひとつの種」
- 講師: Emmé (歌手)
- 会費: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員: 15名(原則として)

◆申込み: ☎042-735-7187 (鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp (わんりい)



◆わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

- ▲7月の講座: 17日(日)
- ▲場所: まちだ中央公民館 第3・4学習室6F
- ▲時間: 10:00~11:30
- ▲講師: 植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲会費: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員: 20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●8月の講座はお休みです

◆申込み: ☎090-1425-0472 (寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp (有為楠)



【映画紹介】

ミリキタニの猫 (2006年・74分)

(原題: The Cats of Mirikitani)

監督: リンダ・ハッテンドーフ

<http://www.uplink.co.jp/thecatsofmirikitani/>

米国各地及び世界20か国以上の映画祭で上映。最優秀長編ドキュメンタリー賞、観客賞、審査員大賞、最優秀作品賞、平和映画賞等々受賞多数

映画の招待状が届いた。何か話しかけて来そうな表情の猫のイラストが真ん中に描かれている。「そうだよねえ～。猫ってこんな目つきでヒトのこと見るから、ちょっと構いたくなる…。」周辺にも様々なポーズや表情のネコたちのイラスト。映画の題名は「ミリキタニの猫」である。

この映画についての知識もなく、ミリキタニの名にも覚えがなかった。どこかの国の、猫を専門に描く絵描きとその作品の映画かと思った。日頃から猫のイラストに弱い。招待状のイラストの魅力に素直に応じた。

ミリキタニがどこかの国の絵描きだって!? 実は、ミリキタニとは三力谷と表記するれっきとした日本人の姓であり、映画は、米国カリフォルニア州で生まれ広島で育ち、今はニューヨーク路上で絵を描いて生活する誇り高き「路上画家・ジミー・ツトム・ミリキタニ」を描くドキュメンタリー映画だった。

既に80歳を超えたミリキタニは、赤いベレー帽を被り、だぶだぶの服に身を包み、背中を丸めて、晴れた日は路上で、雨の日や雪の日は路上の、本屋のビニールハウスの中で(悪天の時は本屋は休みのようだ)、ひたすら絵を描く。路上生活者でありながら、「絵画の巨匠だ」と自称し、毅然とした風貌はかつてのサムライのようだ(実際、彼の家系はサムライの一族だったが)が、彼が描く絵はとても伸びやかで色遣いもよく、思わず手に取ってみたいくなる。

「ミリキタニの猫」の監督の、リンダ・ハッテンドーフは、2001年、たまたま通ったニューヨークの世界貿易センタービル近くの路上で、東洋人の老いた絵描きが描く猫の絵に惹き付けられて声を掛けた。リンダは、老絵描きから「写真を撮ってよ」と言われて、何気なく彼の撮影をした。言葉を交わし、老絵描きの折々の日常を撮影

する中で二人の親しさが増した。

2001年9月11日、世界貿易センタービルがアメリカ同時多発テロ事件によって破壊された。老絵描きは「昔と変らん」と呟きながら、崩れるセンタービルを見やりもせず手元の絵にクレヨンを動かす。が、センタービル周辺は、部外者立ち入り禁止区域となり、行き場を失った老絵描きをリンダは自宅に引き取った。そして少しずつ、その老絵描き・ミリキタニの過去が明らかになる。全てがここから始まった。

日本軍の真珠湾攻撃(1941年12月7日)で、米国本土での反日感情が高まる中、表向きは「日系人を守る」

の名目で、米国西海岸に住む日系米国人は米国市民権を持ちながらも強制収容所に隔離された。ミリキタニは米国で生れた日系二世だが、生後間もなく一家は広島に帰国。が、「優れた日本の芸術を世界に紹介する」という志を抱き、18歳で米国に戻っていた。

ミリキタニが収容されたツールレイク強制収容所は、米国に対する忠誠心審査で、「敵性日本人」と見なされた人々が収容される隔離センターとして機能し、鉄条網を張り巡らされ厳しい監視下に置かれた。米国市民権の放棄を勧められ、ミリキタニは市民権を失い、米軍による1945年8月の広島原爆投下で、兄と母の一族を亡くした。「戦争」によって「家」を失い、「故郷」を失った。

絵を描きながら路上で生活するミリキタニの、どこか稚気ある風貌と物言いが人々を招きよせ、人間味溢れた素晴らしいドキュメンタリーの主人公となった。リンダとの偶然の出会いと、リンダの優しさがなければ、「ミリキタニの猫」もなかったであろう。ヒトとヒトの「出会い」は、時として、摩訶不思議な力を持つことがある。「ミリキタニの猫」は、ちょっとおかしな老絵描きの日常を、成り行きで写すことから始まった。その後、彼の人生を加えることによって、そのまま、見る人々の心情に「反戦」を呼び起こす映画となった。

映画は、日本では2007年にユーロスペース(東京渋谷)で初公開された。今年8月、「ミリキタニの猫」《10周年記念アンコール・特別編》として、新作の短編「ミリキタニの記憶」(監督: Masa 21分)と共に同館で再上映される。

(田井光枝)





「わんりい」新年会に参加の馮学敏さん。2016年2月7日

「わんりい」の皆さんの中には、5月号、6月号、7月号の「わんりい」の表紙を飾って下さった馮学敏さんってどのような方だろうかと思う方もいらっしゃるでしょうね。馮さんを紹介くださった崔貞さんから馮さんのインタビュー記事をとという話もあったのですが、この3ヶ月の間にも、馮さんは、昨日は米国、今日は中国、明日はどこそこの国で写真展というような忙しさのようでした。

今年6月、日本で発行されている華人向けの新聞「中文導報」(<http://www.chubun.com>)に馮学敏さんの消息が掲載されてるとのことで、馮さんの、取りあえずの紹介として、崔貞さんに翻訳頂き掲載します。(田井)

■中文導報(2016年6月)

中国僑網泉州5月19日電(鄒文兵)

華僑大学の招聘により、著名な在日写真家・馮学敏氏は、5月17日、中国福建省泉州にある華僑大学で、「中国文化の旅『故郷シリーズ』撮影の想いを語る」と題して講演し、参加した多数の華僑大学の先生や大学生、及び写真愛好家が氏の講演に耳を傾けた。

その講演で、馮氏は『故郷シリーズ』の中から厳選して『紹興酒』、『雲南茶』と『雲南梯田』の3つのテーマを選び、それぞれの見事な写真作品の背後の物語や撮影時の状況を詳細に紹介した。そして、作品は撮影する者の美的センスと文学的教養が反映されるものである。作品は撮影する者の命であり、言葉であり、子供のような存在である。作品には撮影者の体温がある」と撮影の心を熱く語った。

馮学敏氏は、講演の中で“感動”と“発見”という言葉を度々使っているが、これは正に、中華文明、即ち自分の故郷への馮氏の深い愛が日常の何気ない場面からも美しさを発見させる力となっているということだ。

『撮影によって写し撮るものは、自然の歌であり、さらに命の歌である。撮影者がシャッターを押す際は、撮影対象の魅力がどこにあるのかを瞬時に理解してシャッターを押さなければならない。作品を見る人々に、撮影対象の魅力をしっかりと伝える責任がある』。

講演参加者は、馮氏の話聞きながら撮影現場にいるような気持ちで、上映される作品に見入り、その美しさに惜しめない拍手が沸きあがった。

馮学敏氏の、中国の山や川の風景、その土地の風俗や人物を記録した写真展は、日本をはじめ韓国、アメリカ、オーストラリア、フランスおよび台北、香港、国連ニューヨーク本部などで開催されてきた。

(翻訳：崔貞)

「わんりい」215号の主な目次

北京雑感(105)本屋さんⅡ	2
論語断片⑩君子は事え易くして、説ばしめ難し	3
媛媛讲故事(86)「蛇の恩返し」Ⅲ	4
中国語で読む漢詩の会・6月の講座より	7
元寇と鷹島(9)(最終回)	8
混迷の時代を開くザメンホフの人類主義Ⅴ	10
四姑娘山写真だより(38)冬虫夏草	12
東西文明の比較(6)	14
雨の台湾、小旅行②九份で健行(2)	16
中国・義烏でパン作りの指導をするⅣ	19
2016あさおサークル祭報告	
ケーナ演奏会、ボイストレーニング	20
論語講演会	22
映画紹介「ミリキタニの猫」(2006年)	23
馮学敏さんの最近の消息	24
「わんりい」掲示板	25/26

【2016年7月、8月定例会】

場所：三輪センター・第三会議室

- 7月の定例会：7月12日(火) 13:30～
- 8月の定例会：8月9日(火) 13:30～
- ◆問合せ：☎042-734-5100(わんりい)

8月は、例年通り「わんりい」の発行はありません。9月号の発行予定日は、9月3日(土)又は4日(日)に予定しています。ご参加くださる方は問合せ下さい。

皆様、良い夏休みをお過ごしください。

【東京中国文化センターの催し】

秦風漢韻「中国剪紙芸術展」

2009年に世界無形文化遺産に登録された中国剪紙のなかでも、代表的な陝西剪紙60点の作品を展示。今回は国連より「中国民間工芸美術大使」・庫淑蘭の作品も展示される。

2016年7月5日(火)～7月8日(金)

10:30～17:30(初日15:30～、最終日15:00まで)

東京中国文化センター(入場無料) <http://tokyo.cccweb.org/jp/>

105-0001 港区虎ノ門3-5-1/37森ビル1F
銀座線虎ノ門駅②番出口・徒歩7分

【特別企画】中国剪紙体験プログラム(講師：韓靖)

会場：中国文化センター 日時：7月7日(木)15:00～16:00

*先着：20名 剪紙体験講座参加申込と書いて氏名&電話番号を記入の上、Fax又はメールで申し込む。
Fax:03-6402-8169 メール：info@ccctok.com

主催：東京中国文化センター 中国西安剪紙学会



東京中国文化センター【無料セミナー】

「中医学シリーズ講座」 会場：東京中国文化センター <http://tokyo.cccweb.org/jp/>

105-0001 港区虎ノ門3-5-1/37森ビル1F 銀座線虎ノ門駅②番出口・徒歩7分

▲第1回 7月6日(水)15:00～16:00 **中医学から見る「腎」とその健康養生法**

講師：天津市中医薬研究院名誉院長：張大寧

中医学が「人体の根本」と見なす「腎」の役割と「腎の保健」、「元氣」を保つ漢方薬について講義する

▲第2回 8月24日(水)15:00～16:30 **中国鍼灸について**

講師：上海中医薬大学鍼灸推拿学院副教授：具紫勇

中医学の重要な治療法である鍼灸の起源・発展・種類・適応症について紹介

▲第3回 10月19日(水)15:00～16:30 **経絡を通すことは未病のカギ**

講師：賀偉(精誠堂鍼灸マッサージ治療院(飯田橋院)を開院)

ツボを刺激する針などの治療による、経絡の流通を促す養生法を紹介

【参加申込】

「中医学シリーズ講座申込」と書いて、下記のFax又はメールへ、参加希望日、氏名、性別、電話番号とメールアドレス(あれば)を記入し申し込む。 ● Fax: 03-6402-8169 ● メール: info@ccctok.com

(公財)日中友好会館・文化事業部の催し

～2015上海オリジナル紙芸展より～

中国紙工芸展

<http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/8637>

無料

中国を代表する民間手工芸の切り紙(剪紙)。上海の切り紙は「北方切り紙」の豪快さと「南方切り紙」の繊細さをあわせ持ち、「上海派切り紙」と呼ばれています。

上海工芸美術博物館で開催された「2015上海オリジナル紙芸展」の展示作品から現代紙工芸作品約60点を厳選展示

●2016年6月23日(木)～7月12日(火)(月曜日休館)
10:00(初日15:00)～17:00

●日中友好会館・美術館

105-0001 港区虎ノ門3-5-1/37森ビル1F
銀座線虎ノ門駅②番出口・徒歩7分

●主催：(公財)日中友好会館、上海工芸美術博物館

●問合せ：03-3815-5085

きこう
綦江農民版画展

30以上の少数民族が住む綦江区は重慶市の南部に位置し「中国現代民間絵画の里」と命名されている地域です。民俗の気風が色濃く、民族的特色と地域的特色があります。この地方の農民版画は、色彩は鮮やかで美しく、題材の多くは、農民や少数民族の生き生きとした生活の様子や農村風景を約70点展示

●2016年7月12日(火)～7月22日(金)(土・日休館)
10:30～17:30(最終日は13:00)

●東京中国文化センター

105-0001 港区虎ノ門3-5-1/37森ビル1F
銀座線虎ノ門駅②番出口・徒歩7分

●主催：重慶市文化委員会、東京中国文化センター

●問合せ：☎03-6402-8168(東京中国文化センター)

【わんりい・料理の会】 マレーシアからの留学生・ジェyson・プアさんと一緒に作ろう！

マレーシア・ニュオニャカレー

ニュオニャ・カレーって、どんなカレーなの？ マレーシア料理についてのチョット面白い話も聞いてみよう！

三輪コミュニティセンター・第2・第3会議室 2016年7月10日(日) 10:30～14:00

- 参加会費：1,500円(講師謝礼 会場費) ※留学生は無料
- 募集人数：15名(先着) ●持ち物：エプロン 筆記用具
- ◆申込みと問合せ：☎042-734-5100 'わんりい' E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp



【わんりい・料理の会】 アイディアの餡が生きる

'わんりい' 秋の恒例・手づくり月餅の会 (お土産付)

2016年9月11日(日) 13:00～15:30 麻生市民館・料理室



自分で作ればいろいろな餡を詰めて話題性のある美味しい月餅を焼こう！ 講師は、すっかり月餅作りを自分のものにされた有為楠君代さんです。薄皮で美味しい、小豆餡、ナッツ餡、2種類の月餅を焼きます。焼き立ての、一味違う月餅を、美味しい中国茶で召し上がって見ませんか。

- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 会場費) ※留学生は無料
- 募集人数：15名(最多20名) ●持ち物：エプロン、筆記用具
- ◆申込みと問合せ：☎042-734-5100 E-mail : wanli@jcom.home.ne.jp 'わんりい'

岡上中国語研究会新会員募集

本会は、中国人講師から中国語を楽しく学ぶ会です。中国語に関心ある方、お気軽に見学にお出かけください。

- 毎週土曜日 10:00～12:00
- 麻生市民館岡上分館
<http://www.city.kawasaki.jp/asao/page/0000029136.html>
(〒215-0027 麻生区岡上286-1)
- 講師：劉 冠群 先生(北京出身)
- 会費：月謝5,000円
- ◆問合せ：☎044-865-3757(久保田)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに折に田井にお渡し下さい。

'わんりい'は、いつでも新入会を歓迎しています。
年会費(4月～3月)：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 'わんりい'
年度途中からの入会は会費の割引があります。下記連絡先にお問合せください。
☎042-734-5100 又は E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

初心者のための水墨画教室 体験のお誘い



生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。季節に応じて身近な風物を描ける楽しさを味わえます。

- 講師：満 柏
(日中水墨協会会長)
- 場所：和光大学ポブリホール鶴川
小田急線鶴川駅「北口」から徒歩3分
<http://www.m-shimin-hall.jp/tsurukawa/>
- 曜日・時間：毎月第2、第4(月)
14:00～16:00
- 体験参加費：1000円(見学無料)
- 問合せ：野島 ☎042-735-6135

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

- ①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。
- ②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい'わんりい'をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。